

寶善堂

萬寶古狀揃文鑑全

藏

森

板

治

全



萬寶閣出帽楯文鑑



源義經ハ  
好者の評  
あり兄弟の  
中不和  
吉野  
を隨北國  
小室むく  
茲小富樫  
左門新関を困  
主従止む武藏坊  
南都廬舎那佛建立  
の進を解富樫弁慶  
比英雄文智と  
感一施物  
贈りて主  
從と落

存持画

五節句之事

夫節句との大年中  
に唐の小説ありその  
名のかつりめをむさう  
とひるり節句といふ  
こと年中のあはくふ  
てたと久竹のあひの  
ごとく又日く小時刻  
のあはくふことその



歳且

今日方後對愚息  
仲秋制相條々  
不知文道百武乃終  
不得勝打事  
好彩鷹浦遠世益  
能新事

五節句之事



正月の月と日とを  
 して正月と日とを  
 天よりより万民の  
 心をまごむとせよ  
 の心おと正月と日と  
 又正月朔日の日と  
 元日と日とを元と  
 心をまごむとせよ  
 とまかいらたえと  
 心をまごむとせよ



初卯 詣

一 不辨也 不若也 不  
 一 正實也 正事  
 一 我如能也 不働也 又  
 一 否也 何也 不事  
 一 全也 色也 乱也 有也 也 令  
 一 然也 非也 有也 事

正月の元日と日とを  
 して七日を人日と日とを  
 東方朔の占昏と日とを  
 の元日を結と日とを  
 二日を犬と日とを  
 と一四日を羊と日とを  
 を牛と一六日を馬と  
 一七日を人の日と日とを  
 は祝ふもさかひて人日と  
 日とを



七 草 雜

一 失也 他人也 理也 以也 也 也  
 一 不也 知也 何也 何也 何也 何也  
 一 不也 或也 不也 事也 事也  
 一 嫌也 也 也 也 也 也 也 也  
 一 也 也 也 也 也 也 也 也











在りて用るる  
 又曰日暮常蒲を打  
 小やうの邪氣をねふ  
 の御多の常蒲を酒  
 小ひてて是をのまふ  
 極小のひあつひのまふ  
 とて書を付て御後  
 るふかつてはまふ  
 みるまふひまふを保  
 つの程ゆるひ日男

打蒲菖



情波の如く見る海雲の如く  
 在りて用るる  
 初巻山室の教訓書  
 在りて用るる  
 故の初心の如く見る  
 尚武の戦場は道に在りて

在りて用るる  
 曹人形をまふひの  
 掃力まふまふ  
 今に代光に天を  
 の御美の御美の御  
 へ机をよせて日のか  
 まつとせし小分二  
 の王も早良親王を大  
 ねとて六月八日小宮  
 をひてて大城をせい



理運儀の如く見る  
 机の如く見る  
 在りて用るる  
 三人の如く見る  
 在りて用るる  
 在りて用るる  
 在りて用るる

蒙古 退治





一トをねぐハハハ  
成妙すといり  
乞巧真とゆふ  
まうりハ成武丁より  
そトまるとり又  
たこの小あを合  
星のふまをうし  
糸を針のゆと糸  
を縫しるもの  
うまをいしるもの



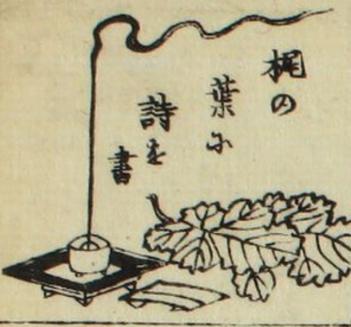
星のひま  
針めをを通す

一トをねぐハハハ  
成妙すといり  
乞巧真とゆふ  
まうりハ成武丁より  
そトまるとり又

腰越状

深我移心志津と云極者  
概亦以信其不動身亦健體  
軟弱思何業痛雷念極心  
厚云以思清亦出外德既深

ハ半ハ漢の世ハ  
まるとり日本  
ハ天平抄云七年  
まじまりて禁中  
初のうと本相の  
國史ともいふ  
その強弱あり  
男女由極の  
かまうり  
とるの又け日



言及終日果天動切我使安化  
疾杜因因他盡然亦切氣  
之間沈沈紅海以素素之食  
乘若思思言洋洋生全因因  
乃以終者素素亦令人使會  
回不能述素之海海初自海

孝行ふ事なき幸氏  
 の少るは日死して是  
 るに鬼神と有りま  
 世の人不徳を病む  
 此の素麺をこの  
 けは六を正をあらへて  
 年中の痛をのま  
 とくその例ふより  
 は日素麺をのり  
 るのとをふりて



素麺

亦不食其穀物因天地  
 任者運移先乃其世業  
 威光映試余在公言  
 非彼老稚命救意言  
 為老難其子初姑  
 仲其為侍使屬在  
 我

たるよりあり  
 ○九月九日を重陽  
 とのあては九の陽を  
 教するもあふま  
 とのやとあての音  
 云云とあり又重九を  
 云云とあり日の本  
 より重陽のそふあ



重陽

遠國故は公民自服  
 因念流約は所障  
 深命命其都使也  
 采是日以内  
 遠下野不和  
 其長





下とをへけせや  
 相系そのとせせぬ  
 身おつさひひまこも  
 その夕々家あり  
 て月を中るひか  
 たふ大く熟ころく  
 く死しと死るひ  
 本を本をわたり  
 けむにむ汝も余  
 由ありたるありと



唐相景

義徳會狀  
 後白河院御遺詔  
 後醍醐天皇御遺詔  
 後深草院御遺詔  
 後花園院御遺詔  
 後光厳院御遺詔  
 後鳥羽院御遺詔  
 後宇治院御遺詔  
 後伏見院御遺詔  
 後醍醐天皇御遺詔  
 後深草院御遺詔  
 後花園院御遺詔  
 後光厳院御遺詔  
 後鳥羽院御遺詔  
 後宇治院御遺詔  
 後伏見院御遺詔

以り移りて統攝  
 祀不見へりこのあり  
 るふまひてよその  
 式を九月九日小佛  
 のあまのたのめ  
 著しよりの吉例  
 こむを本末兼と  
 以又むし九月九日  
 由も雜多あり見  
 をのちれひひきとひ



九月 所々の 祭禮

或時漫池と後園以程切  
 終洋有藤藤觀之職貴麗三采  
 二月北其耳は捕有信叙公家  
 鎌倉治若深草院御遺詔  
 後深草院御遺詔  
 後花園院御遺詔  
 後光厳院御遺詔  
 後鳥羽院御遺詔  
 後宇治院御遺詔  
 後伏見院御遺詔





節のとのみか  
 小風ののさりまく  
 乾かーき長ると  
 のさるるスーこれバ  
 ぶけきき  
 長家下地のまけ目を  
 のふりかへりありま  
 ど日工商とのふとも  
 五穀成粒をねが  
 んや天下を成るら  
 まへるをりてせ



日種を園子に  
 並べ候様は  
 東の傍に  
 園子に  
 不遠而知  
 初為進

瀬のたのびぎ  
 黄白の糸  
 乞形れり  
 るは六  
 くの  
 八初  
 泥ド  
 やも  
 蘇面  
 の患



城郭  
 我々  
 浪魚  
 相冷  
 則夜  
 吾一

占



換むるより是を除  
 りんための日をさるる  
 八九又去くをゆつて一  
 余をつまぐりの推さ  
 又この日を殺して止へ  
 き勝小大其の年  
 句くはるる  
 秋小なりて不しく小  
 社社の多れあも  
 皆入穀成粒のよき



是を足ても田の面此  
 是乃のちもさ成知  
 られ作一は是乃の  
 人の身小害をくんわ  
 中後一八朝を穀小  
 害るうくたは小後  
 いづれものよかかこき  
 式もくは人こまを  
 毎ふべ一又この日包き  
 惟このを用るるは社

華野軍母来物然已責伏  
 欽達中鼓心旋定依道橋  
 眼送看云叙必安成實即  
 不秋有種理禱修為如  
 霜化仍散空年清月伴  
 雲彩現还疎遠音杜者  
 集心

制情素因是難安余兼  
 狂才老の健池少臨以  
 鷹財及分分在頃梅利  
 主王冠冠朱其後秋若  
 野藏塔塔初城者奉  
 勢津園某尚制為武乃

古状





西の事之の去佐日記  
 中もるはのかーら  
 権をさすこととあり  
 るよーとありのそ  
 かりとぞ又豆をう  
 ちさるすお鬼の外  
 福の内との大悪天降  
 伏福住赤湯の児文  
 有り唐古西の方相  
 氏とてまゑこほらる



追 儼

似有るはゆはと云ふ  
 味養國風も遠く  
 松馬坊也様馬都然  
 宿敬業も天不有  
 威雷精柳集勢為  
 可放矣板銀築柳集  
 命相

西をわづりし人  
 小たえ樹の在し  
 小いもの矢をつか  
 てかひまゝ一五こま  
 まにぬきとあり目  
 の長きはふくけり  
 大晦日を 除夜  
 別歳 大歳 行歳  
 歳暮  
 ひとむしむその春小



節 季 候

方沈石松海海津津  
 面員我松津津津津  
 唯小松松松松松松  
 棋道顔流山山山山  
 沖首松松松松松松  
 志清松松松松松松

古伏

三



又傷中  
 まのとりぬらと  
 一のま入 一のま  
 とはまろ  
 そあつあまこあふも  
 ことろのみみ大平日  
 のしをいふ大晴の  
 一年の夏石ふて是  
 をめでこころあふ  
 た平日のむけふ

終致害の経は延命の経  
 死後成運の経は不報の経  
 上国地味奉命の経は有  
 中實中味奉命の経は有  
 経は不報の経は有  
 誠恐謹言



そのひがけとん  
 けい文たをまび  
 武ををるる百姓  
 町人のまろくは  
 ことくまをまろくは  
 ことくまをまろくは  
 ことくまをまろくは  
 ことくまをまろくは  
 のまろくはまろくは  
 めくはまろくはまろくは

寿正三年正月十日  
 進上候者奉命の経は有  
 経は不報の経は有  
 今月七日に於て  
 死後成運の経は有  
 谷後深西海に於て





梅	百	雲	山	木	香	船	櫓	輪	帆	大	能	能	能
青	舌	雀	雀	兔	雞	雞	雞	羊	羊	牛	羊	羊	虎
鷓	香	家	家	家	家	家	家	家	家	家	家	家	家
鷓	鷓	鷓	鷓	鷓	鷓	鷓	鷓	鷓	鷓	鷓	鷓	鷓	鷓



山水  
鳥

雙龍渡所及

大坂進狀

今度乃行相重家親裁  
 准書國高約抱法渡人  
 龍城用書其國公經出案  
 秀賴乃不知石田兒心補物

進心其乃進因應法園案不積  
 時且越上濃州多野合戰切  
 勝頗出國西進進拂法第案案  
 本皇心之生捕備備法第案案  
 寺名法及東都名舍諸之配  
 辱其初可討案案案天會案

篇構冠使

後 來 和 木  
和 來 和 木  
和 來 和 木  
和 來 和 木  
和 來 和 木



三叔殊后御者之間與原之靈  
作之廣運聖人企謀報日端柳  
家之廣運聖人企謀報日端柳  
唐寧威陽廣運聖人企謀報日端柳  
及之廣運聖人企謀報日端柳  
首業之廣運聖人企謀報日端柳

能 角 玉 王 子 龍 來 和 木  
和 來 和 木  
和 來 和 木  
和 來 和 木  
和 來 和 木



廣長平九年  
大野口馬友  
同返狀  
芳美大野口馬友  
大野口馬友  
大野口馬友  
大野口馬友

法	法	法	法	法	法	法	法	法	法
門	門	門	門	門	門	門	門	門	門
戸	戸	戸	戸	戸	戸	戸	戸	戸	戸
人	人	人	人	人	人	人	人	人	人
心	心	心	心	心	心	心	心	心	心
取	取	取	取	取	取	取	取	取	取
取	取	取	取	取	取	取	取	取	取



通記... 天不... 香... 知... 國...

幼童心得州

史... 不... 心...



蘭... 國... 策... 神... 命... 慶...



上右左危小由文字  
 多くて繩を結んで  
 一を結ぶ者乃  
 法を以て文字を結ぶ  
 文字六書八体とを  
 多け且どまがねを  
 用ひて一の字をや  
 つ一夫竺の二を結  
 此十七家とほ平家と  
 名付弘法大師なり  
 王序なるは楠大匠の  
 くりはめら且一なり  
 いろはるはさき  
 へるわすつふさくやらの  
 もれきざりのまを  
 ちんべとさくやけね

本海日中教書今日百集  
 撰抄見は集抄小次能撰抄  
 等名事小治南条新撰  
 白雲集新刊以後有  
 撰抄坊流今回不  
 不及進以有能  
 撰抄坊流今回不  
 撰抄坊流今回不



一あつ山びんを  
 山の井のあつんを  
 ちんべのこ  
 けしをさよふか  
 小あつんあつん  
 けしをさよふか  
 けしをさよふか

延慶三年  
 六月  
 進上規原奉教

慶應三年丁卯九月再刻

書林

江馬繪所二月  
 錦森堂 森屋治兵衛板

